

本年も夏の暑さは厳しく、さらに日照不足が重なり、育てにくい年であったと思います。

多くの愛好家の皆様より、“伸びない、太らない”などの生育不良の声が聞かれました。

今後もこの様な気候は続くと思われます。今年の経験をもとに、来年こそは優秀花を咲かせるよう、対策を講じる必要があると思われます。

“菊づくりは昔からこうしてきた、こんなハズではなかった”は通用しない場面が多くなったように思われます。

まず最初に考えなければならないのが栽培環境です。次に考えなければならないのが培養土と肥料です。

## 栽培環境

菊は一定以上の高温になると、タンパク合成が阻害され、生育不良に陥ります。この問題を解決するには日除けです。遮光率50～60%のものが一般的に使われます。あまり暗くしてしまつと光合成が不足し、生育不良の原因となります。

次に風通しです。場所があれば遮光ネットを張り、外で作り、

秋にハウスに入れることを考えてもよいと思われます。

又、ハウスの防虫ネットは虫が入らないだけではなく風も入らない為、風通しは悪くなります。

また栽培棚は高くする(30～40センチ)輻射熱の関係で低くなると高温になります。

## 培養土

培養土の中でも特に問題となるのが未熟の腐葉土です。

発酵不足の腐葉土を培養土に配合し、使用した場合、植えた後に鉢の中で発酵が進み、ガスが発生します。このガスにより根いたみが発生します。

今までのように夏の気温が高くなければ、緩やかに発酵が進み、大きな影響を受けなかつた為気付かなかつただけです。

気温が上がると発酵が短期間で進む為、ガスの発生が多ク“根いたみ、根ぐされ”の発生につながります。

“粗い腐葉土が欲しい”愛好家の方が少なからずいますので、こうした問題が発生していると考えます。

— 腐葉土は完熟が基本です。

堆肥なども同様です。—

## 土中の有益微生物の増殖・活性化

培養土は「生きた土」などと、しばしば表現されますが「生きた土」とは、土中の微生物が活発に働いている土のことです。高温になると増殖や活動が低下し土の力や機能も悪化します。根に活力を与えたり、肥料と吸収する力も弱まります。その分生長が悪くなつたり、停滞することになります。土中での微生物の働きは“水ハケや通気性”を改善することにあります。

土の細かな粒子や有機物を粒状に固める働きがあり、粒と粒との間に微細なスキ間ができ、水ハケや通気性がよくなり、粒の中には水分を持つことができます。さらに有機物(肥料)を分解し、根が吸える栄養分に作りかえています。肥料はこうして根から吸われ生長に利用されています。

また、こうした働きの他に、微生物の産出栄養分が菊の体内酵素を活性化し免疫力を高め、病害虫に対する抵抗性を高めたり、イキイキと力強い生育を促すなど、多方面によい働きをします。

高温になり、この働きが低下すると根の活力が低下し生育も悪くなつてしまいます。

対策としては微生物のエサの要素が少ない化学肥料(乾燥肥料と称しても化学肥料を多く含んだものなど)を多く含んだ乾燥肥料や液肥は使わない、良質な有機質主体の乾燥肥料やアミノ酸を多く含んだ液肥を使用する。肥料は微生物の栄養源として利用される為、これは極めて重要です。

## 苗づくり ～ 枝づくり

「昔から苗半作」と言われ「優良苗づくり」ができれば菊づくりは半ば成功したと言えます。

近年の暑さは梅雨に入る前の6月から到来する為、枝づくりをする時期と重なつてしまいます。

根張りが不十分な状態で摘芯し、三枝の枝づくりとなる為、三枝がそろわない、また、なかなか伸びてこない為、整枝の時期が大幅に遅くなつてしまいます。

その結果、無理を承知で定植することになり「葉が大きならない」「幹が太らない」まま開花期に入つてしまいます。

今年の失敗はこうした問題が多く発生したように思われます。

その対策はサシ芽を10～15日早め、暑さの影響を受けにくい間に根づくりと枝づくりをする。

サシ穂はビーナインでやや節間を詰め、葉っぱは5～6枚つけ“ガッチリ”したサシ穂を取る。

発根を早め、根量を増す為発根し始めたら「みらい」を散布する。また後々のリン酸を吸収する力の強い苗とする為「P. グリーン」を使用し、鉢上げ2～3日前にドブ漬ける。小鉢上げ後は肥料の吸収をよくし効率よく利用する為「かがやき=活力剤」の使用をおすすめします。

(「かがやきはとても良かった」の声が多い)

今年一年の「よくある失敗と対策」を来年の菊づくり成功の為にとまとめましたのでご紹介いたします。